

児童養護施設の子どもたちに語った「こわい話」(1)

西村 則昭

児童養護施設R学園で子どもの遊び相手のボランティアをしていたとき、筆者は幼児や小学生の子どもたちを楽しませるため、さまざまな「こわい話」を行なった。そのときの子どもたちの反応、様子を報告し、彼らの心理(児童養護施設の子どもならではの心理も含めて)について、魂の現象学の立場(現象を客観的・科学的に観るのではなく、現象の中に入って行って、自分の心も見つめながら、現象の中の論理を見出していくような姿勢)で考えてみた。

キーワード：児童養護施設の子ども、怖い話、魂の現象学

はじめに

児童養護施設R学園で、ぼくは子どもの遊び相手のボランティアをしていたことがある。学園には週一、二回、一年半余りの期間、お邪魔させてもらっていた。幼児や小学生の子どもたちと遊ぶことが多かった。中学生や高校生の相談にのることもあった。あるときたわむれに、小学生の子どもたちにある怖い話を披露したところ、これが受けて、以来よく、子どもたちに「こわい話して」とせがまれるようになった。

「お話」のよいところは、聞き手の反応をうかがいながら、聞き手の心になうように、その場で話を作っていくところにある。ぼくは、「雪女」などの有名な怪談や、どこかで読んだか、聞いたかした話を素材にしたり、まったく創作したりして、物語った。ぼくを囲む子どもたちの作り出す「場の空気」に、臨機応変に波長を合わせながら(ときにはズレながら)。ときには凄惨に、ときにはユーモラスに、ときには物悲しく。ぼくの語ったさまざまな話は、たしかにぼくの頭脳が構成し、ぼくの口から発せられたものだが、それらには子どもたち自身の心が反映されていたように思う。その点、それらの話は子どもたちとの共同制作といってもよいものといえる。またこんなふうにも考えられる。子どもたちの不安を伴う期待に、ぼく自身の「心の中の子ども」が共鳴し、その「子ども」の感性が発揮されて、物語ができていったと。R学園で怪談噺をするようになって、ぼくは子どもの頃に聞いたり読んだりして、とても怖かった話を思い出すことがあり、そのときの気持ちを多少なりとも、蘇らせることができた。

話をはじめると、幼児たちは当然のように、ここぞとばかりにぼくの膝の上に乗ってきた(彼らは肌で感じる愛情に飢えていたから)。小学生たちは眼を輝かせて、ぼくに話の続きを促した(ぼくに甘える幼児たちをすこし疎ましく思いながら)。小学生男子が幼児を押しつけて、ぼくの体に甘えかかってくることや、小学生女子が遠慮がちにぼくの膝にちょこんと腰掛けることもあった。そんな子どもたちに語るぼくの声は、われながらゆったり、やさしい響きをおびていたように思われる(宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニの聞いた「セロのような声」のことを思う)。

昨今、児童擁護施設の保育さんをはじめ、その職員の仕事はよりいっそう大変である。虐待で入所する子も増えている。そうでなくても、親元から引き離され、入所する子は心に深い痛手を負っている。児童養護施設のスタッフが共に暮らしながら、子どもたちの傷をゆっくりと時間をかけて癒しつつ、健全な社会性を体得させ、子どもたちの心身を育てていく責任は重く、その苦労は並大抵のものではない。一方、子どもの遊び相手のボランティアとしてのぼくは、気楽で、一時、学園の中を吹きぬけた風のようなものであった（怪談噺の「なまぬるい風」?）。ぼくは子どもたちの心に何らかの印象を残したかもしれないが、ただそれだけである。この研究ノートは、R学園でぼくのおこなった「こわい話」と、それに対する子どもの反応、様子を報告し、若干のコメントを付すものであるが、この報告に多少とも価値があるとするならば、それは、科学的な観点（心理学者の観点も含めて）、あるいは、大人の常識的な観点からは取りこぼされてしまうだろう小さな事柄（しかしそれは魂の事柄といえるもの）を丹念に拾い集め、考察した点に認められるかもしれない。

1. 恐怖新聞

R学園でぼくが最初に語った怪談は、「恐怖新聞」であった。初夏の夕方、子どもたちの集うホールでのこと。

「はなちゃんという子がいてね。寝ていて、夜中にふと目が覚めてしまった。それからなかなか眠れなかった。真っ暗で、しいーんとしていて、怖いなあって思っていたら、窓がひとりでガラガラって開いた。『新聞』って、窓の外からバサッって、新聞が放り込まれてきた。見てみたら、『恐怖新聞』って書いてあった」

このとき、聞いていた小学校三年生の青花（せいか）ちゃんが、口を挟んできた、「そこには怖い話ばかり載っているのよね。わーっ、怖い!」。青花ちゃんは、大きな強い目をしていて、きりりとした顔立ちの子だった。

「そう、そこには怖い話がいっぱい書いてあった。それが恐怖新聞といってね、それを読むと、百日以内に死んでしまう」と、ぼくがいうと、「青花、この前、夜中に目が覚めた。でも、すぐまた寝てしまったよ」

ぼくは比較的、お化けや幽霊を怖がる子どもであった。しかし小学校高学年になると、科学的・合理的な世界観ができてきて、そうした類のものは「実在」しないと思えるようになってきていた。そうしたときたまたま世にあらわれた、つのだじろうのマンガ『恐怖新聞』（一九七三―五年）。そのマンガとの出遭いは衝撃的だった。『恐怖新聞』は、中学生の少年のもとに、毎晩、恐怖新聞が届けられ、彼の周囲で起こる怪現象を予言するという話。恐怖新聞を読めば、百日寿命が縮まるという（ぼくの話では、「百日以内に死んでしまう」であったが、それは、その方が単純で、わかりやすいと思ったから）。世界各地の怪現象の「実話」を引用しつつ、「これが本当ではないと、はたして否定できるでしょうか」と、論理的に迫ってくる『恐怖新聞』の語り口に、ぼくはまったく圧倒された。

それ以前のお化けや幽霊を怖がっていた時期、ぼくには、霊の「実在」などということは考えなかった。空想と現実との区別はあいまいで、ただ怯えていただけだった。しかし知的に成長し、科学的・合理的な世界観ができてきて、ぼくの眼前にたしかな手応えをもった「現実世界」が立ちあらわれるようになった。小学校の校庭での朝礼のときなど、ぼくは地球がみんなを乗せて

ゆっくりと動いていくのを感じていた。校庭のみんなを空から眺めているような気分。そしてぼくは「実在」という概念を（その言葉自体は知らなくても）、もつようになったのだ。「実在」とは、何らかの物質で構成され、一定の形をもった存在であり、ぼくの前に開けた「現実世界」の中のたしかかな存在のことである。霊などは「実在」しないものとして、そこから除外されていた。しかし『恐怖新聞』によって、そうした類のものの「実在」を認めるように、ぼくの世界観に修正が要請されたのだった。その要請にぼくは抗うことができなかった。ぼくの心にはかつての恐怖心がよみがえってきたが、もはやかつてのような感じ方ではない感じ方で、すなわち、「実在」をそこに認めるような感じ方で、ぼくは霊を怖れるようになったのだった。

2. トイレの花子さんと座敷わらし

ぼくの「恐怖新聞」の話の途中、怖くて耳を両手でふさいでしまった子がいた。青花ちゃんと同じ、小学校三年生の柚葉（ゆずは）ちゃんである。柚葉ちゃんは思いを深く秘めたような、やさしい眼をした子だった。「恐怖新聞」が終わると、子どもたちは「もっと怖い話して」と懇願してきた。「花子さんの話して」という子がいた。六歳の幼稚園児の瑞希（みずき）ちゃんだった。瑞希ちゃんは好奇心いっぱいの子だった。ぼくは瑞希ちゃんの求めに応じて、

「はなちゃんが小学校でね、授業中、どうしてもトイレに行きたくなかった。もうがまんできなくなつて、せんせいに言って、トイレに行った。しいんとした廊下。トイレに来た。中は薄暗く、なんだか怖い感じ。でも、漏れそうなので、怖がってなんかられないので、はなちゃんはトイレに入っていった。個室のドアを開けようとしたら、閉まっている。だれか中にいる。別の個室も同じ。奥から三番目は、花子さんがでるって噂だから飛ばして、また別の個室を見たら、そこにもだれかいるみたい。『授業中なのに、どうして詰まっているの』って、はなちゃんは不思議に思った。空いているのは、奥から三番目だけ。『花子さんなんて嘘に決まっている』って、はなちゃんは勇気を出して、そこを開けたら……、花子さんがいた！ はなちゃんはびっくりして、おもしろしてしまった」(笑)

いちばん笑っていたのは、瑞希ちゃんだった。「それで終わり？ 次は？」と、物足りなそうな青花ちゃんに催促されて、ぼくは「座敷わらしって知っているかな？」と訊いた。怖がりの柚葉ちゃんも、このときにはみんなと同じように、好奇心を湛えた目をぼくに向けていて、「あっ、聞いたことある。でも、どんな話か知らない。その話して」。

「はなちゃんはね、この学園みたいなところで暮らしていた。このホールみたいなところで、五人で遊んでいた。そしたらいつのまにか、六人になっていた。はなちゃんは怒って、『もう、後から勝手にまじってきたのは誰？』って。みんな『ちがう、ちがう』って。誰が後から来たのか、誰にもわからなかった」

「また遊んでいたら、今度は七人になっていたの？」と、茶目っ気のある目をして、口を挟んできたのは瑞希ちゃんだった。「そう、七人になっていた。はなちゃんはまた怒ったけど、誰が後からまじってきたか、誰にもわからなかった」「今度は八人になるの？」と、また瑞希ちゃん。「そう、今度は八人になってね。それから九人になって、十人になって、次々に増えていって、部屋はぎゅうぎゅう詰めで、みんな動けなくなってしまった。はなちゃんは、人に押しつぶされながら、『もーっ、勝手にまじってこないでよう』って怒っていた」

この話の中で「勝手にまじってこないで」と、遊びの場を仕切っているはなちゃんは、柚葉ちゃん

んのイメージでぼくは語っていた。年下の子が柚葉ちゃんたちの遊びに加わるためには、「まぜて」といって、「いいよ」という柚葉ちゃんの許可をもらわなければならなかった（「まぜて」と「いいよ」は、歌うような言い方で交わされる）。そうでないと柚葉ちゃんは、「勝手にまじってこないで」と怒った。

この話に続いて、さらに二、三の怖い話をした後、青花ちゃんがおもむろに、「青花、さっき夜中に目が覚めたっていったけど、そのとき変な物音を聞いたの。あのね、せんせい」といって、大きな強い目で、しっかりこちらを見てから、ぼくの耳元に口を近づけ、「青花、今度の誕生日に自殺しようと思っているの」と、さらりといった。

それから誰かが「座敷わらしごっこしよう」と言い出して、それをすることになった。みんなで誰もいない幼児たちの部屋に行ってみた。その部屋の中をみんなは、息をひそめて覗きこんだ。カーテンが閉まっていて薄暗く、少し無気味な感じがあった。「さっき、あのカーテン、少し動いたよ」と、誰かがいった。そのとき柚葉ちゃんが、トンと足を踏み鳴らした。「わあ、座敷わらしが出たあ！」と叫んで、みんなはドタバタ廊下を走って逃げた。そしてまた覗きに行って、同じようなことを繰り返した。次に、小さい子用のトイレを覗きに行った。男児用と女児用が各三つ、向かい合って並んで、薄闇の中に沈んでいた。ぼくが、「花子さん、花子さん、いたら合図してください」と言うと、また柚葉ちゃんがトンと足を踏み鳴らし、「わあ！」とみんなは逃げた。

子どもは、好奇心に駆られて、不安なことに接近しようとする。そして不安なことを自分がコントロールすることに、面白さを見出す。瑞希ちゃんは、ぼくの「座敷わらし」を混ぜっ返し、ドタバタ喜劇に誘導していったし、柚葉ちゃんは座敷わらしごっこで、足を踏み鳴らして、遊びを盛り上げていた。

ところで、ぼくの「座敷わらし」は、座敷わらしのよく知られたエピソードを借用している。宮澤賢治の童話「ざしき童子（ぼっこ）のはなし」にも、それは語られていて、そこでは座敷で十人の子どもが輪になって遊んでいたところ、いつのまにか十一人に増えている、みんな知っている顔で、誰が座敷わらしかわからない、ということになっている。合理的に考えるならば、最初、人数を勘定した子が自分を数え忘れていて、次に別の子が勘定したときには自分を含めていて、したがって一人増えたようにみんな錯覚してしまったのだ、と説明できる。しかしこの説明で、なあんだ、そういうことか、実は不思議なことは何もなかったのだと納得して、済ましてしまふことが、はたしてできるだろうか。

ぼくは高校生の頃に、宮澤賢治の「ざしき童子のはなし」の中のこのエピソードを読んだとき、ハッと思い出すことがあった。小学校二年生ぐらいの頃からだろうか、ぼくは、自分という物が「今、ここ」に存在しているということを思うと、とても変てこな気分になることがあった。自分とは、雲の上から、世界を見ている、透明な存在ではなかったか。それがいつのまにか地上に、こんな身体で、こんな顔で、こんな名前が存在している。それはとても変なこと……。この変てこな気分に関心して入っていき、その気分をひたっていることもできた。こうした体験は、後に心理学を勉強するようになって、「自我体験」と呼ばれていることを知った。それは、学校からひとりで帰るときや、ぼんやり景色を眺めているときなどに起こるものである。それはだれにでも起きるといっわけではなく、感受性の強い子や孤独な子に起こりがちである。

ここで座敷わらしの右のエピソードを考えてみたい。最初に数え間違いをした子がいたとしよう。その子は自分の視界が世界のすべてだと勘違いしていた、といえる。この子は世界の外側の

いわば透明な存在になっていて、世界の内に存在する自分のことをすっかり忘れていた。そして他の子もみんなを見渡しながら、その数え間違いに気づかないでいた。というのも、他の子もその子と同じように、自分の視界が世界のすべてだと、漠然と思っていたから。しばらくして人数がきちんと数え直され、正確な数が判明する。「座敷わらしは誰か」と、自分以外の子に向かう疑惑に充ちた視線は、そのまま投げ返される。各々の子どもは、見る者から見られる者へ、見られる者から見る者へと変転する。その緊迫した状況の中で、子どもたち各々において、「今、ここ」の自分の存在そのものが突如、浮き彫りにされる。集団催眠のような状態になって、そこにわきおこる無気味さ。その無気味さこそが座敷わらしの正体ではないか。座敷わらしはこんなふうに、子どもたちの間に出現するのではないか。つまり、座敷わらし体験とは、子どもの自我体験の一種ではないかと考えられる。

子どもは、ある程度、知的に発達し、客観的な目が育ってきて、自分のことを「他者の眼差し」で見ることができるようになると、自分自身の存在ということに、多かれ少なかれ思いを致すようになる。そうして自我体験が起こる。中には自分の存在に対して違和感をおぼえてしまう子どもいるだろう。青花ちゃんはさらりと誕生日に自殺するといったが、そうした違和感をいだいていたから、彼女はそのようなことを口にしたのではないか。トイレの花子さんも座敷わらしの同類といえようが、花子さんは特に前思春期の女子の自我体験に関わる現象のように思われる（「児童養護施設の子どもたちに語った『こわい話』(2)」本巻所収参照）。

花子さん体験が終わって、ホールに戻ると、柚葉ちゃんが、「柚葉、怖くなってきた。ねえ、今度は楽しい話して」と、ぼくにいった。ぼくがすぐに話を思いつかないで、ぐずぐずしていると、「柚葉がする。みんな聞いて、聞いて」と、柚葉ちゃんは立ち上がり、笑顔で話しはじめた。明るい声で、手ぶり身振りをまじえながら、「ウンコ大王がいて、ウンコ食べた」といった話だった。「ウンコ、ウンコ」の繰り返しで、ストーリーはよくわからなかった。「楽しい話」とはこんな話なのかと、ぼくは少し呆れた。しかし子どもたちはみんな笑い転げていた。そのときぼくの顔は、まわりに合わせてニコニコしてはいたけれど、ぼくは子どもたちの世界から、少し外れた場所にいることを余儀なくされていた。そのうち夕食の時間を告げる放送が流れて、子どもたちは食堂に行き、ぼくは学園を後にした。

3. やまんば

四歳の華鈴(かりん)ちゃんは、幼稚園から帰ってきて、ぼくの姿をみつけるとばたばたと駆け寄ってきた。そして少したどたどしい、ゆっくりとした抑揚のある言い方で、「かりんちゃんなあ、まっくらけのところでああ、おばけでるとおもったけど、でんかったよ」といった。

華鈴ちゃんが、黒目がちのくりくりした目で、ぼくを見上げていったこの言葉は、ぼくにはとても印象的だった。その言葉にはどんな意味があるのか考えてみたい。子どもは「現実感覚」が未熟である。ここで現実感覚とは、われわれの科学的・合理的な世界観の基礎になるもので、この現実世界はこういうものだという感覚のことである。たとえば、車道に飛び出すのは危険だが、突然お化けが出現して食べられる危険は、この現実世界ではほとんどないに等しい。そうしたことをわれわれは現実生活をおくる上で、心の基底で知っている。そうした心の基底にある世界感覚のことである。現実感覚の乏しい子どもにとって、闇は自らの非力をきわだたせ、不安を掻き立てる。闇は怖いものがひそんでいる場のように思われる。子どもは闇に飲みこまれてしまう恐

怖におびえる。華鈴ちゃんはその頃、夜、暗い場所を見て、怖くなってしまったことがあったのだろう。しかし、お化けがでそうに思った彼女の予期不安は、さいわいなことに裏切られた。この現実世界は本当は怖いことなんてないのだと、彼女は自分のひとつの体験を通して知ることができた。そのことをいつも怖い話をして不安がらせるぼくに「教える」ことで（実際、華鈴ちゃんの言い方は、「教えてあげる」という調子だった）、彼女は現実感覚をしっかりと我が物にしようとしていたのではないか。こんなふうにして子どもは、この世界に対する信頼感を獲得していき、前向きに生きていく姿勢を形作っていくのではないか。

「かりんちゃん、ちいたけ（椎茸）たべれないの」と、あるとき華鈴ちゃんはぼくにいった。

R学園では子どもの好き嫌いは、栄養の偏りが出ない程度には尊重されており、華鈴ちゃんの皿からは椎茸は丁寧に取り除かれていた。ぼくは少し意地悪で、こんな話をした。

「この学園みたいところでね、夜、幼児さんたちが寝ていたら、ガラガラって窓が開いて、『ちいたけ（椎茸）食べれない子はいないかあ』って、やまんばが入ってきた。寝ている子どものおいをくくんかいで、『この子はちいたけのにおいがする。おえーっ』って（笑い）。『この子はどうだろう。おえーっ、この子もちいたけのにおいがする』。そして今度は、華鈴ちゃんのところに来ました」。

「だめ！」と、華鈴ちゃん。「華鈴ちゃんはだめかな。そしたら、はなちゃんのところに来ました。『この子はちいたけの食べれない子だな。よし、この子を連れて行こう』って、やまんばははなちゃんを連れて行きました」。

ぼくのやまんばは、ドラキュラがにんにくの匂いを嫌うように、しいたけの匂いを嫌った。山の妖怪のやまんばが椎茸を怖がったり、なによりも自分の弱点をいって歩くというのも変な話ではあるが、それはともかく、「しいたけ」を「ちいたけ」と発語するのは、小さい子どもの言い方である。小さい子どもはおっぱいをチュウチュウ吸う自らの口に快感をおぼえ、それに馴染んでいる（いた）ので、言葉の音がときおり、「ちい」や「ちえ」や「ちゅ」などになってしまう。ぼくはそんな幼児の言い方を真似たわけである（幼児の心の中から、そのまま出てきたようなやまんばを描きたくて）。

「かりんちゃん、やまんばなんて、こわくないもん。だって、大きくなったら、チェーラームーン（セーラームーン）になって、やまんば、やっつけるんだもん」。「華鈴ちゃんはセーラームーンになりたいんだね」とぼくがいうと、その場にいた同じ四歳の珊瑚ちゃんが、「さんご、大きくなったら、亜美ちゃん（『セーラームーン』に登場する少女）になりたいって思ってたんだけど（珊瑚ちゃんは亜美のようにショートヘアで利発な子であった）、やっぱり看護婦さんになりたいの。ねえ、せんせい、せんせいは大きくなったら、何になりたいの?」。かたわらで仕事をしながら、ぼくたちの会話を聞いていた保母さんは吹き出した。

未来は子どもにとって、自由に自らの願望を描くことのできるキャンバスである。幼児にとって、「大きくなったら」という大人の問いかけは、大人の思う通りには受け取られない。その問いは、ただ憧れの人物（あるいは動物）は何かと問うているに等しい。しかも「子ども」だけが訊かれる特別な問いであることも、幼児にはわかっている。珊瑚ちゃんがぼくにも、その問いを発したということは、ぼくは「子ども」として見られていたということだろう。保母さんに笑われて、珊瑚ちゃんは少し怪訝な顔をしていた。華鈴ちゃんはぼくに、「ねえ、やまんばの絵、描いて」といった。ぼくは鉛筆で、大きな口のやまんばの絵を描いた。

ぼくは幼い頃に見た、やまんばの夢を覚えている。夢のやまんばは、ぼくの母だった。ぼくは

家の中にいて、ガラス戸の向こうの庭を見ていた。そこに大きな恐ろしい顔になった母がいて、狒々のような野蛮な感じで、こっちに向かってきた。ぼくは怖くて、泣き叫んでいるという夢だった。やまんばとは、われわれ人類が普遍的に体験してきた「恐ろしい母」のイメージのひとつ、ユングのいう元型的なイメージのひとつである。「恐ろしい母」は、幼い子どもの心に、きわめて親密な存在で、大きな力をもっている。幼い子どもは、母親あるいはR学園の子どもなら母親代わりの保母さんを通して、どうしてもそれを体験してしまうものである。

ぼくの描いたやまんばは、華鈴ちゃんの弟の酉太(ゆうた)君(三歳)を片手に掴んでいた。しかし酉太君は、泣きながらも、椎茸をやまんばの方に差し出して、反撃していた。それを見て珊瑚ちゃんが、「やまんばは、しいたけが苦手なの?」。珊瑚ちゃんはきちんと「しいたけ」と発語できた。「そう、ちいたけ、怖いよーって、言っている」と、ぼくは絵を示しながら、まことしやかにいった。

ぼくたちはそれから、「やまんばごっこ」をすることになった。ぼくがやまんばになって、「ちいたけ、食べれない子はいないかあ」といって、本棚の陰からあらわれた。ぼくは前屈みになって、両手でワッと掴みかかる格好をした(そのとき、ぼくの意識の片隅には、幼い頃に見た、あの夢のやまんばの母があった)。華鈴ちゃんも珊瑚ちゃんも嬉々として、「ちいたけ」、「しいたけ」と、右手の中の空想の椎茸をぼくに向かって差し出した。華鈴ちゃんは「月に代わってお仕置きよ」と、セーラームーンになっていた。「わあ、ちいたけ、こわいよー」と、やまんばのぼくは逃げ回った。

非力な子どもだけに、妖怪を撃退する武器を手にすることは、とても痛快なことである。空想の中で子どもは、セーラームーンやウルトラマンになり、「強い自分」を想像的に体験する。そうした遊びにおいて、子どもは自らの自我というものを確認し、自我をもつことに喜びを覚える。自我はそうして空想的なものとしてだけでなく、現実的なものとしても、ゆっくりと育まれていく。

こんなふうに華鈴ちゃんと珊瑚ちゃんと、なごやかに遊んでいたら、突然、小学校一年生の竜太(りゅうた)君が割りこんできた。竜太君は、とても端正な理知的な顔の子で、髪を染めているわけではなかったが、今どきのおしゃれな青年のような艶のある茶髪だった。「こいつめ、殺してやる」と、竜太君は怒声を張り上げ、ぼくに攻撃を仕掛けてきた。ウルトラマンのようでも、怪獣のようでもなく、遊びというよりは、本当に生きるか死ぬかの真剣な戦いのようだった。「殺してやる」を連発しながら、竜太君は全力でぼくを押し倒した。予想以上に強い力。まったく加減することなしに、ぼくを殴り続けた。ぼくはひらすら防御のていだった。竜太君のおかげで、ぼくの眼鏡のチタン製の細い蔓はひん曲がってしまった。以後、こういう事態に備えて、ぼくは学園では眼鏡ははずしておくことにした。

竜太君はぼくに甘えたくて、かまってほしくて、こんな行動にでたのだろう。竜太君の中には、日頃の鬱憤が相当蓄積されていたようだ(彼に意地悪する年上の男の子がいたから)。その鬱憤を想像力でふんわり表現する心の余裕がなく、混沌とした性急な仕方では、それを表出できなかったということだろう。

4. 大入道と雪山の怪

土曜日の午後、初夏の日差しの照りつけるR学園の中庭。柚葉ちゃんたち小学生数名が、ごっこ遊びをしようということになった。ぼくもそれに加えてもらった。「ケーキ屋さんごっこ」など、設定はしばらく混乱していたが、やがてひとつに落ち着いた。柚葉ちゃんがお母さんで、ぼくが

お父さんで、青花ちゃんと幼児たちが子どもという配役。男の子たちは「飲み屋さん」を営んでいた。ぼくはその店で葉っぱの入った水のお酒を飲んだ。そこに柚葉ちゃんの演じるお母さんが迎えに来て、「あなた、お酒ばかり飲んでないで、仕事してくださいね」といった。ほんとうに妻が夫をたしなめるような、柚葉ちゃんの黒い瞳だった。帰宅すると、柚葉ちゃんはぼくに泥水で、お酒を作ってくれて、「あなた、今日はこれぐらいにしておいてくださいね」といった。

竜太君は飲み屋さんだったが、いつのまにか子ども役に変わっていて、「お父ちゃん、お父ちゃん」と、ぼくに甘えかかってくる。むさぼるような、荒っぽい甘え方だった。もはや竜太君の眼中にまわりの子らはなく、ぼくとふたりだけの世界に浸ろうとした。そんな彼の欲望にぼくは応えることはできなかった。すると竜太君はぼくからパツと離れ、怒って、少し離れたところから、石を投げつけてきた。そしてどこかに行ってしまった。

青花ちゃんは、赤土を水にいれて、掻き混ぜて、「これ、にんじんジュース。お父さんの健康のために、作ってあげたの」と、それをぼくにくれた。それから青花ちゃんは、「携帯電話」(木片)をぼくに手渡し、「電話してみて」といった。ぼくは電話する真似をした。「お母さんに電話してるの?」と訊く青花ちゃんに、ぼくはふざけて、「彼女」と答えてにやりとした。「えっ、お父さん、彼女つくったの!」と、青花ちゃんは素っ頓狂な声をあげ、「別れてね。お母さんに言い付けるからね」といった。青花ちゃんは嬉々として、柚葉ちゃんのお母さんに言い付けていたが、柚葉ちゃんは、「もう、そんなのやめて!」と、その展開にはまったく乗り気でなかった。それで青花ちゃんもやる気をなくしてしまい、ぼくの傍に来て、少し沈んだ声で、「こわい話して」といった。ぼくはこんな話をした。

「こんな天気のいい日に、子どもらが外で遊んでいるとね、大入道がでるんだよ。あの家の屋根の向こうからとか、あの山の向こうから、ぬうっとあらわれて、子どもらが遊んでいるのをじっと眺めている。子どもが振り返って、空を見上げると、すうっと消えてしまう。今、みんなが遊んでいたときも、こうやって(ぼくは目をカッと見開いて、上から覗き込む恰好をした)、見ていたかもしれないよ」。

「怖くないの?」と、柚葉ちゃん。「うん、ただ空から眺めているだけだよ」。「変なの!」と、青花ちゃん。

「こうやったら、大入道が見えるよ」と、ぼくは両腕を水平にして、片脚で立った。そして焼けた地面に濃く伸びた自分の影をじっと見つめ、ゆっくりと十数え、ぱっと空を見た。残像現象でぼくの白い影が、澄み渡った初夏の空にあった。さっそく子どもたちは真似をした。うまくできる子とできない子がいた。青花ちゃんは「本当に見えた!」と、嬉しそうだった。

この遊びは、ぼくが小学校三年生のとき、TVのなにかのCMで知ったものだ。碧空に白く輝く大きなシルエットは不思議で、一抹の無気味さを伴っていた。ぼくは天空から世界を見渡す目としての自分の存在の不思議を感じないではいられなかった。

中庭でのごっこ遊びは崩壊してしまい、子どもたちは散々になっていった。ぼくは青花ちゃんと木陰に腰を下ろした。青花ちゃんは「こわい話して」と甘えるようにいった。透明な青空に純白の雲が流れてきた。ぼくは雪を連想した。ぼくが話しはじめると、青花ちゃんはちょこんとぼくの膝に腰掛けた。

「はなちゃんはスキーに行きました。滑っていると、『はなちゃん、はなちゃん』って、後ろから呼ぶ声がする。止まって、振り返ってみたけど、誰もいない。また滑っていると、『はなちゃん、はなちゃん』って。でも、誰もいない。はなちゃんは気にしないことにして、また滑ろうとする

と、動かなくなってしまった。あれっ、どうしたのかなって、スキー板を見ると、なんと雪の中から白い手が出ていて、はなちゃんのスキー板を、がしっと掴んでいた」。

「その子はどうして死んだの？」と、青花ちゃんの気の早い質問。「雪崩にあった」。「雪崩って？」。「雪がね、どどどーっていっぱい、いっぱい落ちてきて、埋まってしまったの」。こういって、ぼくの心に話の続きが閃いて、「はなちゃんが雪の中から出た手を見て、びっくりした、ちょうどそのとき、先の方で、どどどーって雪崩が起こった。このままはなちゃんが滑っていたら、雪崩に巻きこまれてしまうところだった。あの手は、昔、雪崩で死んだ子どもの霊の手で、はなちゃんのスキーを止めて、たすけてくれたのでした」

「やっぱりそうか！」と、青花ちゃんは大きな目を輝かせた。

この「やっぱりそうか！」は、ぼくにはとても印象的に聞こえた。その瞬間、この話はぼくの話ではなく、青花ちゃんの心の生み出した話になってしまったように感じられた。というのも、その話の結末は、ぼくが望んだものというよりは、青花ちゃんが望んだものであったから。青花ちゃんの期待するものが、ぼくの心にたしかに伝わったように思った。彼女の心は、ちょっと怖いけれど、ほんとうはやさしく、守ってくれる神秘的な存在を求めているのだ。

5. 子泣きじじい

酉太（ゆうた）君は二歳になって、乳児院からR学園に来た。入所当時はとても不安の大きな子で、だれかれかまわず「だっこ、だっこ」といってしがみついていた。いっときも床に自分の足をつけていることができない様子で、彼の心身が激しく欲しているものを、必死で得ようとしているようだった。実習生やボランティアがいるときは、多忙な保母さんに代わって、彼らが酉太君の「だっこ役」となっていた。ときには年長の子も、彼の面倒をみてくれていた。ぼくもR学園にいくと、必ず酉太君の「だっこ役」になった。酉太君はだっこすると、ぴったり体をはりつかせ、重心を合わせてくるので、とても軽く感じられた。とはいっても、酉太君のことは、正直いってわずらわしく感じられることもないではなかった。彼をだっこしながら、たとえば鬼ごっこで駆け回るのは疲れた（だかれた彼の方は、上機嫌の赤ん坊のようにヘラヘラ笑っていたが）。それでぼくはこんな話を作った。

「はなちゃんは、学校の帰りが遅くなった。真っ暗な道、通らなければならない。イヤだなあ。さあ、その暗い道に来た。ここ、お化けでるってうわさだからなあって、はなちゃんが思っていると、こちらにぱたぱたぱたって、駆け寄ってくるものがある。わあ、もうでてきたーっ。それは子どもの声で、『だっこ、だっこ』って。酉太君みたいだね。なんだ子どもかあって、はなちゃんは安心した。でも、こんな時間にどこの子どもだろう。『だっこ、だっこ』って、酉太君みたいにくっついてくるので、はなちゃんは仕方なく、だっこしてあげた。少し行くと、電柱に灯りがついていて、その灯りの下で、ひよいとその子の顔を見て、びっくりした。なんと……おっさんの顔（笑）。おっさんの顔で、『えへへへ。だっこ、だっこ。えへへへ』って、喜んでい

土曜の午後、ぼくは酉太君をだっこしながら、中庭に出ていった。そこではいつものように柚葉ちゃんを中心にごっこ遊びがおこなわれていた。酉太君はぼくと融合して、生涯離れまいとするようにぼくの胸に吸いついていた。柚葉ちゃんはそんな酉太君をみると、「甘えすぎ！ そんなに甘えていると、地獄に行くよ！」と、冷たくいい放った。

地獄の話は以前、柚葉ちゃんたちに囲まれて、ぼくはおこなったことがあった。しかしこんな

ふうにはぼくの話が使われるのは心外だった。賽の河原、血の池地獄、針地獄の光景をぼくが描き出したのは、妖しくもなつかしい魂の感覚を子どもたちと共に味わいたかったからである。幼い子に無理を強いる「教育」のためなどでは決してなかった。

「ぼくがだっこすると、酉太君の甘えがでてしまうってことかな。でも、酉太君は赤ちゃんのとき、あまりだっこされてなかったのじゃないかな。だから、だっこ、だっこっていうんじゃないかな」といって、柚葉ちゃんは「そりゃ、柚葉だって、甘えさせてもらってなかった」といって、「三歳か四歳か、二歳の頃」と、彼女の記憶はあいまいながら、「お父さんに顔を殴られて、鼻血がでた」。その柚葉ちゃんの言葉を引き継ぐように、華鈴ちゃん（柚葉ちゃんの妹）がその場で見えていたかのように、「ゆずはちゃんなあ、おとうちゃんに、おちゃけ（お酒）のんじゃだめっていったらなあ、なぐられて、はなぢでたの」といった。「学校の友達にいても、そんなのウソっていわれる」と、柚葉ちゃん。

そういえば、前に柚葉ちゃんがお母さん役になり、ぼくがお父さん役になったごっこ遊びで、彼女が「あなた、お酒ばかり飲んでないで、仕事してくださいね」といったことがあった。その言葉にこめられていた柚葉ちゃんの思いの深さをぼくはこのときはじめて知った。華鈴ちゃんは他にもたどたどしい口調で、一生懸命にいくつかの辛い出来事を語ってくれた。ぼくは胸が熱くなった。

6. お札はがし

「この学園には、お化け来ないでしょ」と、瑞希ちゃんに訊かれたとき、ぼくは食堂の壁に貼ってある、どこかの寺院のお札のことを直ちに想起して、「うん、そうだよ。食堂にお札、はってあったよね」といった。「お札って?」。「見に行こうか」。「連れて行って」と、瑞希ちゃんはぼくにしがみついていてきた。ぼくは瑞希ちゃんをだっこして見に行った。三、四人の子どもが後をついてきた。「これがはってあったら、お化けはこの学園の中には入れないのだよ」と、ぼくはいった。幼くして辛い境遇にさらされ、心細い思いをして、R学園に来た子どもたちであるからこそ、ここではしっかりと守られている感じを子どもたちには改めて確認してほしいと、ぼくは思った。ぼくは三遊亭園朝の『怪談牡丹灯籠』を想起して、こんな話を作った。

「はなちゃんはね、この学園みたいところで暮らしていたの。食堂にはこんなお札が貼ってあった。だから、はなちゃんの学園には、怖いことはなにもおこらなかつた。ところがね、ある日の夕方、もうだいぶあたりが暗くなった頃、学園の中学生の男の子が帰ってきた。学園の前に来ると、髪の毛の長い女の人がそこに立っていた。その女の人が男の子に声をかけてきて、『ちょっと、すみません。私の頼みを聞いてくれませんか?』(幽霊のような口調で)って。男の子は『イヤだ!』(駄々っ子の調子で)って(笑)。『それでは百円あげるから、お願いを聞いてくれませんか?』って」。

「ぼくなら千円じゃないとね」と、小学校三年生の隼太（はやた）君が口を挟んできた。隼太君は虫好きの眼鏡少年だった。「『そうですか、それなら千円あげます。それでお願いといたしますのは、食堂に貼ってある、あのお札を、あなたに剥がしてもらいたいのです』って。男の子は千円もらって、学園の中に入っていった」。

「ぼくならお金だけもらっておいて、やらない」と、隼太君。「そう、その男の子も面倒くさいし、見つかって先生に怒られるのも嫌だから、やらなかつた。そうしたら次の日の夕方、またあの女の人が学園の前に立っていた。『ちょっと、あなた、その男の子。約束でしたよね。はや

くあのお札を剥がして下さい。あのお札が貼ってあると、私は中に入れたいのです。中に入れないと……』。黒目がちの目をまるくして聞き入っている華鈴ちゃんの方をぼくは向いて、少し声を大きくして、『華鈴ちゃんを連れていけないのですう!』。

「だめ!」と、華鈴ちゃん。「華鈴ちゃんはだめかな。そうしたら『はなちゃんを連れて行けないのです。もしも約束通りにしてくれないと、こわいことになりますよ(ここは凄みをきかせて)。こわいことですよ。それってどんなことかわかりますか?』』といて、ぼくは隼太君に「こわいことって、どんなことになるかわかる?」と訊いてみた(ぼく自身、考えてなかった)。彼は少し考えてから、「わからない。それからどうなったの?」。「男の子は怖くなって、いう通りにした。そうしたら、その夜、幽霊の女が入ってきて、寝ているはなちゃんを連れて行ってしまいました」。そしてぼくは「だからあのお札を悪戯して、剥がすようなことがあってはいけないんだよ」と、神妙な面持ちで付け加えた。

翌日、「お札ごっこ」がおこなわれていた。学園の建物の裏に廻って、子どもたちは壁に水に濡らした葉っぱをいくつもペタペタと貼り付けた。柚葉ちゃんは、葉っぱに黒マジックで怒った顔の絵を描いて、その下に「ダメ」と書いて貼った。「ダメ」とは、妖怪幽霊がこのみんなの学園に入ってきては「ダメ」ということだろう。

7. 壁 女

この二、三ヶ月で竜太君は粗暴さが増した。園長先生も竜太君には困惑顔だった。ある日、中庭で竜太君が、どこから拾ってきたのか、草刈鎌をもっていて、武術のひとり稽古のようなことをしていた。それを見たぼくが危ないと思って、「それ、こっちへ貸して」というと、竜太君は端正な顔でニヤリと不敵な笑みを浮かべ、ぼくに向かって攻撃の構えをした。下手に取り上げようとしたら、ぼくはその鎌の刃で怪我をしてしまうかもしれない。このときはちょっと危険を感じた。ぼくが辛抱強く「貸して。お願いだから」といっていると、ついにおとなしく竜太君は鎌を手渡してくれた。その後、R学園の廊下でぼくは、子どもたちに囲まれて、こんな話をした。

「この学園のようなところでね、はなちゃんが廊下を歩いていたら、壁になんか変なものが生えていた。(R学園の漆喰の壁をぼくは軽く叩いた)。それはなんと……人間の手だった。きれいな白い女の手の手が、こうやって(ぼくは幽霊のような手をした)。『キャー』って、はなちゃんは叫んだ。すると男の子がやってきた。竜太君みたいないたずらっ子。男の子は壁の手を見ると、ニヤツとして、なにか悪いことを考えた様子。すぐさまどっかへ走って行って、戻ってきた男の手には、鎌があった」。

「今日、竜太君のもっていたやつ?」と、瑞希ちゃん。「そう、あれ。はなちゃんは、『そんなことやめて!』って。はなちゃんのほうが年上だったけど、その子いうことを聞かなかった。それどころか、手にもった鎌をはなちゃんのほうに向けてきた。悪い子だね」。

「せんせいにいいに行ったら」と、瑞希ちゃん。「そうだね。はなちゃんはせんせいにいいに行った。そのあいだに、男の子は鎌で、壁の手の指をぐさっと……。一本の指をなくした手は、こうやって(ぼくは苦痛にもがく手を演じて)、痛がっていた。はなちゃんがせんせいを呼んできて、その場に駆けつけてきたときには、もう手はなかった。でも、そこには血がべっとりついていて、これが壁女というものです」。

「手が痛がっているところが怖かった」と、青花ちゃんは隣の柚葉ちゃんにいった。柚葉ちゃん

んは、目を丸くして、「うん」とうなづいていた。

壁から出た手の怖さは、それがあらわれる壁の中に異界を感じさせることから来る怖さである。しかし異界とは、われわれの住むこの世界の外側にあるのではない。自分の手をじっと見詰めていると、無気味な感じが起こってくることがある。馴染みの自分の手のイメージが払拭され、しだいに見えてくる物としての自分の手。自分の手に関して「見えているのに見えていない」と訴える人に、ぼくは出会ったことがある。離人感と呼ばれる事態である。こんなふうな離人感を伴って物としての自分を感じる時、われわれは異界の真っ只中に自分を見出すことになる。これも自我体験の一種である。

8. むっへらぼう

大学の図書館から江戸時代の妖怪図巻（復刻版）を借り出して、子どもたちといっしょに眺めて楽しんだことがあった（ぼくは子どもの頃、妖怪の図鑑がほしくて仕方なかったことがあり、夢にまで見た記憶がある）。やや稚拙で、どこかユーモラスな漫画ふうの絵が、なつかしく、ぼくの気に入っていたが、現代の子どもたちの心にもすんなり受け入れられた様子だった。

白い着物姿の雪女のページに来ると、のぞきこんでいた青花ちゃんは、その雪女を指差して、はき捨てるように、「ぶさいく！」といった。それから急に雪女の祟りを怖れたのか、彼女はあわてて、その絵に向かって「ごめんなさい」と謝っていた。小さい女兒なら雪女に、やまんぼと同様の「怖いお母さん」を見るだろう。しかし青花ちゃんくらいの年齢になると、そこに「女としてのライバル」を見るのだなど、ぼくは面白く思った。

妖怪図巻で小さい子らがとくに怖がったのは、ぬれ女だった。ぬれ女とは、頭は髪の長い女で、その下は蛇身のおどろおどろしい妖怪だった。瑞希ちゃんは、「これ、ぬれているのね。だから、ぬれ女っていうのね」と、神妙な顔で納得していた。

その図巻のいくつかの妖怪の話を、ぼくは思いつくままに創作して語った。むっへらぼうというのがいた。それは、ぶよぶよした腐肉のかたまりのようで、皺が大きな目鼻のように見え、小さな手足のついた怪物である。

「この学園のようなところでね、ある晩のこと、幼稚園児のはなちゃんは、なかなか眠れなかった。他の幼児さんたちは、みんなすやすやと眠っていた。夜もふけて、あたりはしんと静まり返っていた。お寺の鐘がぼおーんと鳴った。すると廊下をぺちゃっ、へちゃっ、くちゃっ、何か歩く音が聞こえてきた（この「ぺちゃっ、へちゃっ、くちゃっ」という音は、幼児たちを喜ばせた）。あれっ、なんだろう、怖いなって、はなちゃんはお布団の中で思っていた。そいつは幼児さんの部屋の前で、びたりと止まった。からからって戸が開いた。ぺちゃっ、へちゃっ、くちゃっ、そいつが中に入ってきた。はなちゃんがこわごわ布団の隙間から見てみると、こんなの（妖怪図巻の絵を示して）がいた。そいつは竜太君（この場にいなかった竜太君の実名を使わせてもらった）のところに来ると、その寝顔をこうやってのぞきこんでいた。なにをするのかなって思っていたら、見る間にちゅるちゅるちゅるって、竜太君の口の中に吸い込まれていった。おやつに食べるゼリーあるよね。あんな感じ。はなちゃんは布団にもぐって、ぶるぶる震えていたけど、いつのまにか眠ってしまった。朝になった。いつものように先生が起こしにきた。はなちゃんは昨日の晩のことを思い出して、竜太君、どうなっているだろうと、胸をドキドキさせていた。竜太君はいつもと変わりなかった。いや、いつもと違っていた！ 竜太君はパッと起き上がると、すぐ

に着替えて、自分のパジャマを丁寧にたたみだした。いつもはそんなことしないのに。はなちゃんが驚いて竜太君のほうを見ていると、竜太君はくるっとこっちを向いて、『あっ、はなちゃん、おはよう。今日も幼稚園、頑張ろうね』って。こうして竜太君はとてもいい子になったのです。]

「なあんだ、いいお化けだったのか」と、瑞希ちゃんの少々意外な感想。ぼくには竜太君の急な変わりようはなにか不吉の前兆のようで、怖いと思われるのだが。

ぬっへらぼうの話語り終わったとき、竜太君がやってきた。ぼくの手妖怪図巻を見ると、「なにそれ。見せて、見せて」と、荒っぼく、ぼくの手からもぎ取ろうとした。ぼくが渡すまいとすると、その本の頁の端が欠けてしまった。

この頃、ぼくとは別の曜日に継続的に、R学園に子どもの遊び相手のボランティアに来ている若い男性がいた。彼はぼくとは違って、精悍で、爽やかなスポーツマンで、男の子たちと野球をして遊んだりしていた。ぼくは彼と話す機会があったが、そのとき竜太君の話になった。彼はいった、「竜太君はみんなといるときは、ぼくを独占しようとして、乱暴なこともしますが、他に誰もいないとき、一対一で相手をしていると、とても静かで、やさしいいい子です。ぼくは学園の先生にお願いして、何度か、彼だけをこっそり近くの公園に連れて行って、ふたりで遊んでいます」。

ぼくはR学園の中で、竜太君と怪獣ごっこをして遊ぶことは何度かあった（ぼく自身も楽しめた）が、わざわざ彼のために、公園に行って一対一で、じっくり遊ぶというようなことはなかった。しかしそのボランティアの青年のいうようなことはありうると思った。このような「お兄さん」がR学園に来てくれることは、竜太君にとって、どんなに幸せなことか、ぼくはしみじみ思った。

まもなく竜太君は再婚した母親のもとに引き取られることになった。土曜の昼下がり、新しい父親の運転する車が、R学園に迎えに来た。後部座席に少し緊張した面持ちで、大きな目をキョロキョロさせた竜太君を学園のみんな（ぼくもそこにいた）は、彼の幸せを願って、手を振って見送った。

9. ぬれ女

R学園で怖い話をするときぼくは、話の途中で子どもたちとやりとりをしていた。そうしたとき子どもの言葉から、施設の子どもならではの淋しさが感じられることもあった。ぼくは主人公が親と暮らす一般家庭の子どもではよくなかろうと、余計な気を使って、施設の子どものようにしたり、その辺はぼかしたりしていた。あるとき話の途中で、瑞希ちゃんが「それでその子はお母さんにいいに行ったの」と訊いてきた。

この瑞希ちゃん言葉に、ぼくはハッと思った。怖い体験をしたら、なによりもお母さんに報告するのが、子どもにとって自然なことなのだ。お母さんというものは、なによりも現実感覚がしっかりしていて、家族が快適に暮らせるように家の中をきちんと整え（R学園にはそんなお母さんに恵まれなかった子もいるが）、子どもをこの現実の枠の中にしっかりと守護してくれる存在である。そして子どもが明るい現実感覚を我が物にしていけるように、その手本を示してくれる存在である。怖い体験をして不安になり、現実感覚が危うくなった子どもは、お母さんに話を聞いてもらうことで、また明るい現実感覚を回復できるのだ。ふんわりと、しかもどっしりと構えて、子どもの心の中のもやもや不安を受け取ってくれるお母さん。日常の現実の拠点となるお母さん。瑞希ちゃんに「それでその子はお母さんにいいに行ったの？」と訊かれて以来、ぼくの話の中には、そんな「お母さん」を意識してよく登場させるようになった。

「すぐに終わるんじゃないかって、長い話してね」と、青花ちゃんがいったので、ぼくはあの妖怪図巻で子どもたちの心を掴んだぬれ女の話をすることにした。

「はなちゃんはお母さんと川遊びにいった。きれいな川。はなちゃんはサンダルで、水の中、じゃぶじゃぶ入っていった、『わっ、冷たい！』って。水の中に手を入れて、きれいな石を探したりして、遊んでいた。すると川上から、ながーい髪の毛が流れてきた。それがはなちゃんの手首に、くるくるってまきついてきた、『いやっ、なにこれ！』って。はなちゃんはお母さんにいいにいった。お母さんは『はなちゃん、それはぬれ女の髪の毛ですよ。はやくとってしまわないと、大変なことになりますよ』って。はなちゃんはほどこうとするけど、からまっていて、なかなかとれなかった。お母さんにやってもらおうと、ほどけた。『もう帰りましょ』って、お母さんが行って、家に帰った。はなちゃんは、ごはん食べて、お風呂入って、テレビ観て、さあ、パジャマに着替えて寝ましょってとき、自分の足をみてびっくりした。足首にあのぬれ女の髪の毛がまきついていて、気づかないで、家に帰ってきてしまった。あわてて『お母さん、お母さん』って。お母さんはそれをみて、『ああ、大変なことになってしまった。ぬれ女は自分の髪の毛を子どもに巻きつけておいて、夜になってから、その髪の毛を伝ってやってくるのです。もう近くまで来ているかもしれません。ちょうどそのとき、玄関のドアが開いて、ズルズルズルッって音が聞こえてきた。大蛇の這う音。ぬれ女は頭の下は蛇。お母さんは『さあ、はやく、それをほどいて！』。『わーん、ほどけないよう』。『さあ、はやく』。お母さんがやって、やっとほどけた。『なにか身代わりになるものに、これを結んでおかないと』と、お母さんは行って、『これがいい』って、はなちゃんの人形に、ぬれ女の髪の毛を結んだ。そしてはなちゃんとお母さんは、部屋の隅で小さくうずくまって、ふるえていた。ぬれ女が来た。ズルズルズルッ。ぬれた髪からは、ピチャ、ピチャって、しずく。『おお、ここにいたんだね』って、ぬれ女は、はなちゃんの人形をもって、行ってしまった。大事にしていた人形が連れていかれて、はなちゃんは悲しかったけど、たすかってよかったって思った」

今回は、あまり口を挟む子もなく、みんな神妙な顔で聞いていた。華鈴ちゃんは、いつのまにかぼくの胡座の中に身を沈みこませ、仔猫のように体をまるめて、黒目がちな目をとろんとさせて聞いていた。語り終わると、青花ちゃんが、「うん、ちょっと長い話だった」と静かにいった。

それからしばらく経ったある日のこと。華鈴ちゃんは、ぬれ女の絵を描いて見せてくれた。それは、長い髪をふたつにくくって、その両方に赤いリボンをつけた、少女マンガふうのとてもかわいらしいぬれ女だった。あの恐ろしいぬれ女も、華鈴ちゃんの心に馴染んでくると、こんなふうイメージされるのだと、ぼくは面白く思った。

別の日、中庭のブランコにぼくはひとり腰掛けながら、戯れに地面に、ビスクドールのような女の子の顔（以前、そのような顔を描いたら、青花ちゃんが「花子さん」といった）を三つ描いた。そこに華鈴ちゃんと瑞希ちゃんが来た。華鈴ちゃんはぼくの隣のブランコに乗って、漕ぎはじめて、突然、地面の顔をひとつ発見するや、ビクッと身をこわばらせ、パッと飛びのいた。アッ、もうひとつ顔、ワア、もうひとつ顔と、華鈴ちゃんの怖がりようは予想以上だった。瑞希ちゃんがいたずらっぽい笑みで、「それさっき、ぬれ女が描いていたよ」というと、華鈴ちゃんは、黒目がちの目を大きくして、「へび！、へび！」と大騒ぎになった。地面にあるのは、顔だけなのだが、華鈴ちゃんはその下にぬれ女の蛇身をまさしく見たのだ。瑞希ちゃんがそれを足でかき消そうとすると、華鈴ちゃんは、「消しちゃ、だめだよ！ 怒ってまた出てくるって！」。そして向こうで洗濯物を干していた保母さんのところに走って行って、「へびが出た！ へびが出た！」と行って、その保母さんを引っ張ってきた。「蛇じゃないじゃない。かわいい女の子の顔じゃない」と、

ぬれ女のことなど知る由もない保母さんは、不思議そうに微笑んでいた。事情を知っている瑞希ちゃんとぼくは、悪戯っぽい目を交しあい、「小さい子を怖がらして、おぬしも悪よのう」といった感じで、ウフフと笑いあったことはいうまでもない。